



第212号
 発行所
 一般社団法人 芝蘭会
 京都大学医学部同窓会
 〒606-8315
 京都市左京区吉田近衛町
 TEL 075-751-2713
 FAX 075-752-4015
 E-mail: info@shirankai.or.jp
 http://www.shirankai.or.jp

主 な 内 容

- ② 退任あいさつ
- ③ 退任あいさつ／新任あいさつ
- ④ 校友会・KMSIFUNDより
- ⑤ がん免疫総合研究センター／SHIRANCAFE
- ⑥ 人事異動・会員計報

芝蘭会員の先生方におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

昨年10月に研究科長に任せられ、半年余りが経過しました。そして2023年4月より、前任の岩井一宏会長の後を受けて芝蘭会会長を拝命致しましたので、改めましてご挨拶申し上げます。

医学研究科長の任務と皆様の「京大愛」

医学研究科長の任務は研究科全体の運営ということになります。具体的には、基礎・社会医学から臨床医学にわたる医学科の学部教育、人間健康科学科の学生にかかわる案件、これらの大学院課程（特に学位審査）、さらに基礎・社会医学系と臨床医学系の教員人事と概算要求等をはじめとする組織体制と施設の整備と研究の推進があります。このほか、医学研究科が関わる様々な産学連携事業や京大関係病院、多数の同窓生が加入されており、芝蘭会や学生の父母の集まりである校友会、大学本部の運営に関わる様々な会議体もあり、学外では全国医学部長・病院長会議といった実に広汎かつ多様な範囲の案件が含まれます。

当初は、京都大学医学研究科という組織がいかに巨大な組織であるかということに圧倒され、気が遠くなるような思いをしましたが、幸いにも多くの先生方や事務職員の皆様のおかげで、少しずつですが仕事に慣れて参りました。また、他学

出身の私が、果たして同窓会組織である芝蘭会に受け入れていただけるのか、若干の不安もありましたが、2023年2月には東京支部の総会に早速呼んでいただき、大高道也東京支部長をはじめとする多くの皆様に

在、新型コロナウイルス感染症もおおむね下火となり、5月8日には5類への引き下げが実施され、多くの制限が解除されてきています。これまで学生実習をお願いして参りました関係病院の先生方には、学生の感染状況

ださい。そして、4年次のマイコースや5-6年次のイレクティブによる学生の海外派遣については、縁が切れかかっていた派遣先もありましたが、医学教育国際化推進センターの国際化部門を中

実もありますので、そういった活動に対するKMSIFUND等を通じて芝蘭会員の皆様の一層のご支援を賜りましたら幸いです。

さらにこの4月からは、岡山大学で学部教育や女性医師の職

の芝蘭会館での祝賀会を開催することができました。そこでは個性的な教授陣や校友会役員の方々、さらには在校生からのそれぞれに思いのあふれる祝辞をいただき、卒業生・新入生諸君にとっても良い思い出になったのではないかと思います。開催に至るまでの関係者の皆様のご尽力に感謝致します。

オンラインの利便性と対面の充実感

しばらく前にネイチャー誌の編集長のマグダレーナ・スキッパ先生が京大にお出でになり、お話をする機会がありました。

せん。オンラインでの国際的なミーティングが手軽になっていく一方で、対面でコミュニケーションを復活させることも大変重要です。

そういうなかで、現在医学研究科として運営している米岡カリフォルニア大学サンディエゴ校にあるオンラインラボポトリにおいて、3月初旬に地元

芝蘭会会長 就任あいさつ
 コロナ禍からの回復を力を合わせて進めましょう



芝蘭会会長
 医学研究科長・医学部長
 伊佐正



温かく迎えていただき、皆様の「京大愛」を深く感じつつ大変楽しい時間を過ごすことができました。有難うございました。

アフターコロナの主眼は学生教育の活性化

先だつての「芝蘭会報」210号の研究科長就任あいさつでは「最大の課題はコロナ禍からの回復」であると申しました。現

にあわせて急に実習の予定が変更するなど大変ご迷惑をお掛けしておりましたが、それぞれの事例において柔軟に対応いただきましたこと、改めて御礼申し上げます。今後も断事は許しません、学生の病院実習などの様々な教育課程が、より一層円滑に実施されるものと期待しています。また、お気づきの点がありましたら遠慮なくご指摘く

心に派遣先の再開拓と外国人教員のスタッフにも支援いただいたの学生の事前トレーニングも開始し、意欲のある学生たちに充実した時間を送ってもらおうというに後押しをして参りたいと思

一方で、円安と諸物価高騰により2-3か月の海外渡航に要する経費が増大しており、学生とご家族の負担が増している事

場復帰プログラム等で活躍されていきました片岡仁美先生を医学教育の教授にお迎えすることとなりました。学部教育と卒業のキャリアパスを繋げて、きめ細やかに充実させて参りたいと考えています。

また、今春の卒業式と入学式にあたっては、校友会や事務職員の皆様と協議を重ね、食事は割愛致しましたが、式終了後

たが、そこでは「コロナ禍においてオンラインネットワークの拡大の過程の中で、ネットワークの周辺から人々がドロップアウトしていく傾向がある」ことを懸念されていたのが印象的でした。これは日本国内のアカデミ

また、今春の卒業式と入学式にあたっては、校友会や事務職員の皆様と協議を重ね、食事は割愛致しましたが、式終了後

一方でこの原稿を書いております4月の時点では、教授会はまだオンライン開催のままです。今後、どのような手順で対面化していくかは大きな課題です。とはいえ、単純にコロナ禍前に戻すのではなく、この間に私たちが学んできたオンラインシステムの良い点は残し、オンラインと対面をどのようにうまく組み合わせ、効率の良い会議・意思決定システムを作っていくかが重要であると考えています。

また、コロナ禍前には夏・冬の2回開催しておりました名誉教授と現役教授の懇談会も、丸4年間開催されておられません。この会では新任の教授に自己紹介いただくことを恒例としておりましたが、この4年間に新たに着任された医学研究科の教授は20名超、つまり全体の3分の1強にあたります。これについては本年7月に再開の予定で、いろいろな世代の教授経験者の先輩方と現役世代が闊達に交流できる機会を作りたくと考えています。

クラブ活動を介した世代間交流の意義

ところで、私は現在、ポータ部の部長を務めておりますが、今年度において様々なクラブ活動で活動の主体を務めている4回生は、入学当初からコロナ禍のため、西日本医科学学生総合体育大会をはじめ様々な活動の経験の大半が欠落している世代になります。卒業生との交流の場もほとんど途絶えていたことから、各クラブの伝統が断絶する危機に瀕していることを懸念しています。医学部という組織においては、このようなクラブ活動等を介する世代を超えた繋がりが様々な局面で生涯にわたる重要な意味を持つてきます。今後、各クラブの対外試合やOB/OGと現役が交流する機会等が増えて来ると思いますが、芝蘭会員の先生方におかれましては是非ともそのような機会には足を運んでいただき、現役世代との交流を再度活性化していただけたらと思います。宜しくお願致します。

「顔が見える」をテーマにホームページを改訂

また、最近の実績として、医学部・医学研究科のホームページを全面改訂致しました。現在の研究科の様子をお知りになりたい皆様には、まずはホームページを訪れてみてください。スマホ対応もできています。昨年春から広報委員やワーキンググループの支援を得て、「知りたい情報にすぐにとどり着ける」「教員や学生の顔が見える」ホームページを目標として作って参りました。こちらにつきましても、ご意見などいただけましたら幸いです。

以上、甚だ雑多なことを申し上げましたが、就任の挨拶とさせていただきます。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、宜しくお願ひ申し上げます。

退任あいさし

脳卒中医療・ケアの整備をめざして



宮本 享

京都大医学部附属病院
脳卒中療養支援センター長

2009年から14年間にわたって教授として京都大学脳神経外科教室をとり、2019年度からは京都大学医学部附属病院を4年間務めさせていただきました。大過なく任を終えることができました。芝蘭会の皆様のご厚情のおかげです。誠にありがとうございました。

京大病院長就任時に、高難度医療・研究・医療人育成を支えるのは、地域との連携と高度急性期医療という広い土台であると申し上げました。土台がしっかりしていなければ、高層建築はしっかりと安定した建物にはならないからです。中病棟の新築や中央診療棟のリノベーションを通じて、京大病院救急部の活動は飛躍的に進歩し、大学病院としても京都府内の施設としても屈指の救急応需件数を誇るまでに成長しました。

私大病院長在任期間は、コロナ禍とほぼ重なりました。京大病院は感染拡大当初から高難度急性期医療とコロナ診療の両立という難しいミッションをブレずに果たしてきました。職員の献身的な尽力には頭がさがる思いです。一方、コロナ禍のうれしい副産物として、京都府・京都府医師会として病院がワンチームとして同じベクトルで対策

支援は京大病院が、心臓病については京都府立医大病院が中心となって協力しながら、事業を進めていくというユニークなモデルになっています。

このような背景も踏まえて、私は2023年4月から京大病院脳卒中療養支援センター・もやもや病支援センターの特任病院教授として、生活期の脳卒中患者・家族の相談支援

体制の整備に努めております。今後は自分のエネルギーや時間を、これまでベッドサイドでいろいろなことを教えていただき、結果として私をこれまで押し上げてくださった患者さんに恩返しするような仕事に使っていきたいと考えています。14年間大変お世話になりました。芝蘭会の皆様の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

研究、臨床、教育に邁進した18年



別所和久

前京都大学大学院
医学研究科
感覚運動系外科学講座
口腔外科学分野 教授

2005年8月に京都大学口腔外科4代目教授に昇任後、約18年間務めさせていただきましたが、2023年3月31日をもって定年退職いたしました。この間、芝蘭会の先生方には大変お世話になり、ありがとうございました。心より御礼申し上げます。

ト・顎顔面骨折・顎変形症手術に用いる生体材料、顎骨再建などの治療を主に経験させていただきました。

三重大から京都大学に帰任した時点では、口腔外科学教室には十分な基礎研究の出来る設備・体制がなく、科研究を得ての実験室・機器購入から始めました。当時は大変でしたが、今と違っては懐かしさを感じます。その後、京都大学創立百周年記念留學助成金の援助も頂き、また、テキサス大学ヘルスサイエンスセンターサンアントニオ校バイオマテリアル部門から生体材料へのBMP応用指導の依頼もあり、1年半教室を離れましたが、帰国後には遺伝子導入・幹細胞を利用した再生医療へと研究を大きく発展させることが出来ました。さらに、教授就任後もこれらの成果を基に、教室員の努力のお陰で骨形成のみならず、軟骨・歯・粘膜炎の再生医療にまで発展させるこ

このため、京大病院にも脳卒中相談窓口として「脳卒中療養支援センター」が2022年4月に設置されました。また、「脳卒中・心臓病等総合支援センター」という厚労省の事業が始まり、京都府では脳卒中相談・

これが出来ました。

これらとは別に京大病院内では、骨代謝基礎研究の基盤を充実した京大病院の機器もあり、骨吸収抑制剤関連顎骨骨髄炎治療におきまして、世界で最も多くの症例を集める施設となり、治療率も良い成果を上げております。また、他科連携の良さにより、口腔健康管理での他科の全身疾患治療への寄与を目的とした周術期口腔機能管理でも日本最多の治療実績を上げ、厚生労働省の助成金も得られたことから、ベストセラーとなったマニアル本を出版出来るまでに至りました。

教育におきましては、私の教授就任翌年に歯科医師臨床研修必須化の開始という大改革があったことから、後れを取っていた当科教育に根子入れをし、日本救急医学会認定ICLSコースおよび臨床研修指導歯科医講習会を国内医学部で唯一、独自主催できるまでに至り、全国の医学部口腔外科医の教育にも寄与しております。また、国際貢献の意味でも多くの研究部門や臨床部門の留学生に加え、オーストラリア2大学からの歯学部臨床実習生も受け入れられました。

就任時に新任のご挨拶として「芝蘭会報」に書かせて頂いた私に与えられた使命である「研究、臨床、教育のいずれの面でも京都大学医学部の名に恥じないよう、教室員と一緒に世界をリードする口腔外科学教室をめざしたい」とについては、些か不十分ではありましたが、私の足りなかつたところを補ってくれることを、今後の口腔外科学教室に期待したいと思っております。当科の発展に芝蘭会の皆様方からのご指導、ご鞭撻を今後さらに賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

常に新しい課題に取り組むことのできた19年間



小杉 眞司

京都大学医学研究科
ゲノム医療学
特任教授

2004年3月に、社会健康医学系専攻医療倫理学分野に京大病院検査部講師より着任しました。同4月から退職までは医師の倫理委員会委員長を務めました。当初の重要課題としてヒトES細胞を用いた研究がありました。本来ヒトたるべき胚をこわして作成するヒトES細胞を用いる研究の妥当性、倫理性など、困難な内容が議論されていまして、iPS細胞の出現によって、課題は減少しました。

また当時は京大がメッカだった生体肝移植も重要なテーマでした。健康なドナーにメスを入れる生体臓器移植において、ドナーの自発性をどのように評価するかは常に問題でした。2004年末ごろ、4親等パキスタン人ドナーからの移植について、その自発性が疑わしいとして、申請者である当時の病院長の田中一先生に対して、初めて否決の評決を出したことがありました。ドナー候補者は2年後に窃盗容疑で逮捕され、取り調べの中で、レシピエントと血縁関係はなく、術後に金銭を受け取る予定だったということが分かった臓器売買のケースでした。

その後、研究倫理指針が整備されていくにつれて、臨床研究、疫学研究などの審査が中心になりました。現在は審査件数が年間2000件を超え、着任当初の約8倍となり、新規・変

更の審査だけでなく、定期報告有害事象、不適合などの審査も必要となってきたので、業務量は莫大に増加していますが、約150名の方に委員、小委員などとしてピアレビューに参加いただいております。なんとかマネージメントができました。

着任の年の12月には10人いた社会健康医学系専攻の教授の中で、最も新米にもかかわらず、専攻長を担当することになりました。当時は専攻長の任期は定められておらず、足掛け7年間担当しました。この時期に取り組んだ2つのことについて書かせていただきます。

1つ目は、長浜コホートです。2006年から開始し、5年1クール目の4クール目に入っています。これに積極的に取り組んだのは次の3つの理由からです。まず、社会健康医学系専攻として、地域の研究フィールドの確保が重要と思われたこと。次に、従来型の住民コホートにゲノム情報を加えた研究を行うというところで、専門としてきた遺伝医学に関係が深いものであったこと。3つ目は、条例としていわゆる長浜ルールを作成する必要があったこと。当時のゲノム指針では、病院で、患者さんを対象とし、特定の遺伝子を解析することしかイメージされていませんでした。長浜プロジェクトでは、地域で、健康者を対象に、ゲノムワイドな解析も行



い、さらに長期にわたって個人をフォローするという内容で、当時のゲノム指針を越えた内容であったからです。これは、医療倫理学の専門領域とも深く関係することでした。長浜市民1万人を対象とし、特定健診の上乗せとして実施する多目的コホートで、ほとんど欠損値のないという驚異的なデータをえることができています。

2つ目は、遺伝カウンセリングコースの設置です。専攻長時代に整備を進めた特別コースによる人材養成の一環です。2000年ごろから厚労省研究班で、遺伝カウンセリング養成の制度設計に参加していました。

2005年に科学技術振興調整費の新興分野人材養成プログラムに応募し、採択されました。補助金期間の終了後も自助努力での継続が前提となっていたため、困難もありましたし、就職先があるのかという批判もありました。しかし、現在は国主導でおこなわれるようになってきたがんゲノム医療や難病ゲノム医療において不可欠な存在として、認定遺伝カウンセリングが認識され引く手あまたの状況になっていきます。病院遺伝子診療部、がんセンター、各診療科社会健康医学系専攻の非常に多くの先生方に協力いただいたことを感謝いたします。

退職後は、共同研究講座ゲノム医療学の研究員として、ゲノム医療全体の促進のために研究支援にたずさわらせていただいております。長い間ありがとうございました。

ネットワークと コラボレーション、 そしてフレンドシップ



東京都立病院機構
東京都立駒込病院院長
戸井 雅和

2023年3月をもちまして定年退任をさせていただきました。2007年2月に着任し、約16年間にわたり本当にお世話になりました。ご指導、ご鞭撻に心より感謝を申し上げます。さまざまな挑戦の機会を与えていただき、多くのご支援とご協力を賜りましたことに深く御礼を申し上げます。

乳腺外科学分野は消化管外科、肝胆臓移植小児外科に続く第3の外科学教室として設立されました。当時から関連施設を含む京大グループの乳癌診療数は日本有数で、既に施設間の連

臨床には試行錯誤の余裕は殆どありませんが、多くの方と仮想的に試行錯誤を繰り返していると、自然に見えてくるようなこともあり、それらは臨床研究、臨床試験に発展していったように思います。一方で、大切なことだと直感するものの結論が出ないことも多々あり、外部のエキスパートに参加してもらい更に議論を深めたということもありました。何れも忘れられないこととして刻まれています。

京大と関連施設との間では、京都乳癌研究ネットワークが立ち上がり、そこが臨床研究やトランスレーショナルリサーチの基盤になりました。臨床情報とサンプルの収集と解析は、それぞれBreast Oncology Research Network (BORN) とBORN Bio-Bank (BBB) が母体となり研究が行われています。

レギュラーな意見交換の場として京都乳癌コンセンサス会議と国際大会があり、前者は年に2-3回、後者は2年に一度の頻度で開催されています。これらの活動は自然発生的に始まり、いつの間にか拡大しました。中でも思い出が深いのは国際大

会の準備で、1年以上をかけて皆で検討課題を考え、volume questionに関するさまざまなディスカッションを行いました。その作業自体が臨床や研究のレベルアップに繋がり、教育的効果も生んだと思えますが、自分の中ではそれ以上に、乳癌を多少とも深く理解する術を学ばせていただいたという感覚が残っています。本当に有難いことでした。

臨床情報や生物試料を用いた研究も本格化し、これから色々な新発見が出てくると思えます。臨床試験からは、多くのpractice changing 研究が創出され、そこに参加する幸運に恵まれましたが、今後もさらに成果が出てくると思えます。

ネットワークを大切に、コラボレーションを進め、生まれつつあるフレンドシップを宝物としてこれからもやって行きたいと考えております。4月からは東京都立駒込病院で働いております。引き続きご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。芝蘭会の皆様のご健勝と益々のご発展を心から祈念申し上げます。



新任あいさつ

創造的なサイエンスを 目指して



京都大学大学院医学研究科
生体構造医学講座
発生生物学分野 教授
柘 卓志

このたび2023年1月より、生体構造医学講座 発生生物学分野に着任しました。この紙面をお借りして、芝蘭会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

発生生物学分野は、医学研究科の根幹をなす基礎研究のさらなる強化を目指すため、新設の教室として設置されました。発生生物学には長年の歴史がありますが、遺伝子の網羅的解析、分子生物学・遺伝子操作、顕微鏡など、さまざまな技術が発達した今、これまで考えられなかった問題を新たに設定できるようになりました。可能性が大きく

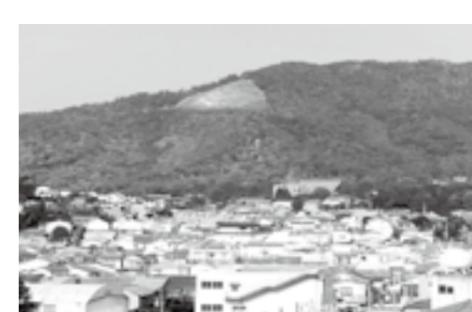
広がる中、さまざまな遺伝子機能、細胞学的知見を、生体の生理的な条件で検討するには、発生学は最適と考えます。また、疾患を理解し、根源的治療を考える上で、臓器、生体ができあがる仕組みの理解は、重要な基礎になります。発生学を広く捉え、新しい視点、手法を用いて、新たな未知分野を開拓するという目標で当分野の創設を提案しました。

哺乳類の卵には極性がなく、胚の対称性は最初に数回分裂する間に自律的に破られます。その間、細胞系譜や遺伝子発現には確率的なばらつきがあり、にもかかわらず、どのように哺乳類初期胚が一定の形、大きさ、パターン、機能を持った胚に発生するかは、根源的な問題です。

私たちは、発生、細胞生物学に、物理、数学を取り入れ、顕微鏡やコンピュータ解析も開発しながら、マウス胚は、遺伝子、細胞の極性や形、張力、組織の大きさや圧力を統合するフィードバック制御により、ゆらぎを持ちながら強固な機能システムを作る、という自己組織化原理を提唱しました。さらに、これまで未知だった子宮着床期の研究を行う実験系を開発し、哺乳類発生における胚と子宮の相互作用の重要性を明らかにしつつあります。

これからの時代、技術はますます発展し、AIを含む自動化も進み、技術的に不可能なことはなくなっていくと思います。その中で、我々科学者の役割は、新たな問題を設定すること、創造性のあるアプローチを産み出すことと考えます。つまり、大量のデータが簡単に手に入るが故に、科学者は本来の役割、創造に回帰できるはずですが、芸術作品を見れば作家を認識できるように、個性あるサイエンスを作り上げるよう努力を続けたいと思います。

私は、1993年に京大医学部を卒業し、神戸中央市民病院で臨床研修を2年した後、京都大学大学院医学研究科分子細胞生物学教室(故月田承一郎教授)にて2000年に学位を取得しました。その後、ドイツ、フライブルクのマックスプランク研究所(Max Planck Institute)にて2002年から同所グループリーダー、2007年からミュンスタールのマックスプランク研究所、2011年からハイデルベルグの欧州分子生物学研究所(EMBL)、そして2021年からはオランダ、ユトレヒトのヒュブレイト研究所にて、グループリーダーとして



京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金

(KMS-FUND) だより

〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
TEL 075-753-4322
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

さらなる支援の充実を



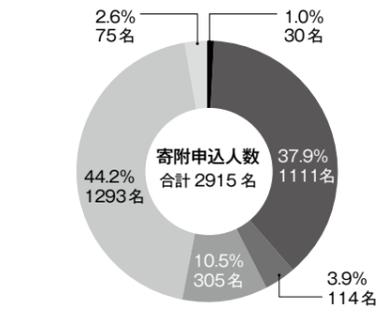
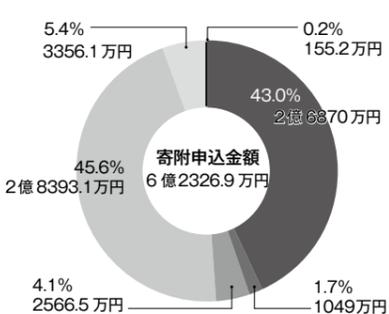
KMS-FUND 委員長 2023年
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授
大森 孝一

令和5年度も引き続き京都大学医学部教育研究支援基金 (Kyoto University Medical Student and Researcher Support-Fund: KMS-FUND) 委員会の委員長を拝命いたしました。よろしくお願いたします。

KMS-FUNDは、平成19年に「学生の学習や研修活動などの教育支援、大学院生の研究活動などの研究支援」を主な目的として設立され発展してきました。基金創設によって、学生の御家族や同窓生である芝蘭会会

員並びに教職員が、京都大学医学部における学生の学習・研究環境整備に貢献できる枠組みが整いました。

医学部学生会館の建設(平成22年竣工)に始まり、現在学生会館はクラブ活動の部室や24時間利用可能な自習室として活用されており、平成26年度からは清掃



2022年12月31日現在

- 医学部生
- 医学部父母
- 人間健康科学科父母
- 教職員
- 芝蘭会員・OB
- 一般

令和5年教育研究支援基金 (KMS-FUND) 委員会委員

委員長 大森 孝一	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授
斎藤 通紀	機能微細形態学 教授
竹内 理	医化学 教授
伊達 洋至	呼吸器外科学 教授
中本 裕士	画像診断学・核医学 教授
今中 雄一	医療経済学 教授
山田 重人	人間健康科学系専攻生体構造学 教授
山田 均	芝蘭会事務局長
河野矢 英成	医学研究科事務部長

成金として学生1名あたり5万円を支援しています。

新型コロナウイルス感染症の流行にともない、令和2年5月から緊急学生支援寄付の受付を開始しました。オンライン授業教材の作成を助成し、新型コロナウイルス感染症の治療に従事する大学生の休業補償の枠組みを創りました。令和3年7月から、食生活に支障が出るほど経済的に困窮する学生に対して、京都大学生生活協同組合のミールシステムにより食事を提供する制度を開始しました。令和4年4月からは、学生による新型コロナウイルスに関する研究を助成する制度を開始しました。15件に総額354万円の助成を行いました。国のコロナ対応は今年5月から大きく変わるようですが、まだその余波は続いており、今さらこれらへの支援を続けるべきかと思っています。

このように、KMS-FUNDは、学生の生活や勉学を広くサポートする施設整備と京都大学ならではの教育や研究に携わる学生へのサポートの両輪で事業を進めてきました。お陰様で、令和4年12月31日現在の累計基金総額は6億2,326,9万円となり、寄付者数は2,915名に達しました。寄付者数2,915名。皆様の御支援に心より感謝申し上げます。また、研究者を支援する仕組みとして令和2年度からクラウドファンディングの制度を創りました。これまで11件に総額243,8万5,408円の研究支援をいただいております。この時からKMS-FUNDの英文名にresearcherが入っています。With/postコロナ時代において、京都大学医学部、医学研究科は、世界的な医学の研究、教育、医療機関をめざして発展していくべき使命があります。国内外の医学部に比べるとまだまだ改善していく課題が多くあります。芝蘭会、校友会ならびに関係の皆様方におかれましては、より一層の御支援をいただきますようお願い申し上げます。

令和3年度 京都大学医学部若手研究者優秀論文賞 KMYIA 受賞者

【基礎研究部門】

氏名	現所属	論文投稿時の身分	論文題目	掲載誌
曾根 尚之	医学部附属病院 呼吸器内科 医員	呼吸器内科学分野 研究生	Multicellular modeling of ciliopathy by combining iPS cells and microfluidic airway-on-a-chip technology	Science Translational Medicine
細川 智永	名古屋大学理学部 生命理学科 講師	システム神経薬理学分野 特定研究員	CaMKII activation persistently segregates postsynaptic proteins via liquid phase separation	Nature Neuroscience
佐伯 龍之介	医学専攻 (腫瘍生物学分野) 博士課程4 回生	医学専攻 (腫瘍生物学分野) 博士課程3 回生	Combined landscape of single-nucleotide variants and copy number alterations in clonal hematopoiesis	Nature Medicine

医学研究科 システム神経薬理学 特定研究員 (論文掲載時)

細川智永

この度は京都大学医学部若手研究者優秀論文賞という栄誉にあずかりまして、身に余る光栄に存じます。これはひとえに、未熟な私に様々な成長の機会を与えてくださったシステム神経薬理学の林康紀教授、私の研究哲学の規範となり日常的にご指導ご鞭撻いただいた實吉岳郎准教授、ともに苦難を乗り越えて喜びを分かち合った劉品吾博士課程学生(当時)、技術的なご指導を賜りましたDr. Mingjie Zhang (香港科学技術大学)、Dr. Eric Hovoy (ボルドー大学)といった先生方のおかげであり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は学習と記憶の分子機構に興味を持ち、特に神経細胞同士を繋ぐシナプス内のタンパク質の動態について研究してまいりました。シナプス内にはシナプス後膜(PSD)と呼ばれる、数百種類のタンパク質が凝縮した構造体が存在し、シナプス伝達を調節しています。学習時にはこのPSDの構成成分が再編され物性が持続的に変化することで情報が固定され記憶が成立しますが、その詳細な分子機構はわかっていませんでした。

今回受賞対象となりました論文は、学習時のPSDの持続的な物性が液相分離と呼ばれる物理現象によって説明できることを示したものです。液相分離とは水と油のように液体と液体とが分離する物理現象ですが、タンパク質のような生体高分子も細胞内で相分離により液体としてのダイナミクスを持った凝縮体を形成し、様々な細胞機能を担っていることがわかってきています。私はこの現象を知ったとき、ただちにその重要性を直感し、技術を習得しにすぐさま専門家のいる香港へ飛んだのです。その技術を日本に持ち帰ってからは様々なアイディ

アと興味深い結果が湧き水のように溢れ出て、あっという間に論文の骨子が完成しました。

特に重大な転換点となったのは、PSDのタンパク質群を精製し5種ほど混合してから学習模倣刺激を与えると、あたかも卵焼きの混ざった白身と黄身が分離して目玉焼きになるかのように、凝縮体内でタンパク質群が相分離し2つのグループにくっきりと区画化する現象を発見したことでした。これはまるで手品か魔法のように感じられ、発見した時には椅子から落ちそうになったほど驚いたものです。我々はこの不可思議で美しい現象を、学習後に受容体を一か所に凝縮しPSD構造を神経伝達物質の受容に最適化するための仕組みであると考えています。今後はこの驚きと興奮を忘れずに、本受賞を励みに、より一層研究に精進してまいります。

医学研究科 腫瘍生物学講座 3年生 (論文掲載時)

佐伯龍之介

この度は京都大学医学部若手研究者優秀賞KMYIAを頂戴し、大変光栄に存じます。この場をお借りして、腫瘍生物学講座の小川誠司教授をはじめ、日頃よりご指導を賜っております先生方、皆様にご謝を申し上げます。

今回受賞対象となった論文は、「クロニン性造血における遺伝子変異とコピー数異常の統合解析」です。クロニン性造血は、加齢に伴い出現する血液腫瘍の前駆状態として見出された現象ですが、同時に心血管疾患のリスクファクターであることも見出されており、近年その臨床的重要性が認識され始めています。クロニン性造血は、過去の研究では「遺伝子変異」と「コピー数異常」(Copy number alteration: CNA)という2種類のゲノム異常により観測されてきました。しかし、両方の異常を同時に解析した研究は存在しなかったため、クロニン性造血におけるゲノム異常の全体像は未だ明らかになっていませんでした。本研究では、約1万例の健康者から採取された末梢血サンプルについてクロニン性造血の統合解析を実施し、クロニン性造血における遺伝子変異とCNAの全体像を初めて明らかにするとともに、臨床予後への影響を評価しました。その結果、平均70歳の集団の半分弱に何らかのゲノム異常が見出され、これらのゲノム異常は複数のものが有意に共存する傾向を認めました。クロニン性造血を有する被験者では血液腫瘍のリスクが約2倍上昇していましたが、その中でもリスクの大きさは様々であり、検出されたゲノム異常の数や、クロニンの大きさ、ゲノム異常の種類などによってさらにリスクが層別化されることが判明しました。また心血管疾患については、クロニン性造血が心血管疾患のリスクを上昇させるという既存の所見を確認するだけでなく、遺伝子変異とCNAが共存する場合にさらにリスクが高まることを見出しました。

結論として、今回の遺伝子変異とCNAの統合解析により、クロニン性造血の中でも特に血液腫瘍・心血管疾患のリスクが高い集団を抽出することが可能となりました。これらの知見は、今後のクロニン性造血に関連する臨床・研究に大きく貢献することが期待されます。

今回の大規模コホートにおけるクロニン性造血の解析は、東京大学医学部研究所バイオバンク・ジャパンが保有するリソースの提供を受けました。また、1万例もの被験者におけるゲノム解析は技術的にも困難を伴いますが、学内外の共同研究者の方々の支えにより円滑に研究を進めることができました。今後はKMYIAの受賞を励みにして、さらに医学の発展に貢献できるように精進を進めてまいります。末筆となりましたが、教育研究支援基金にご寄附いただきました方々に心より感謝するとともに、今後の校友会のますますの発展を祈念いたします。

第16回京都大学医学部校友会 総会・講演会のお知らせ

日時 令和5年9月23日(土・祝日)午後
開催形態 オンライン開催
申し込み受け付けはおって連絡いたします。



がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟の完成予想図

がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb棟 令和5年度完成、6年度の使用開始をめざして 建設工事は着々と進行中

医学研究科では、国からの補助金に加え、今般、プリストル・マイヤーズスクイブ株式会社から総額55億円の寄附を受け、がん免疫研究・治療を推進するための中核施設として、「がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb 棟」を医学部構内南東に建設中です。

この寄附に際して、本庶佑医学研究科附属がん免疫総合研究センター長（高等研究院特別教授）は、「プリストル・マイヤーズスクイブ社と京都大学との数十年にわたる長い友情がこのような形で実を結び、未来のがん研究者に希望の火を灯したことは、誠に大きな喜びであります」と感謝の意を述べられました。

建物は、令和5年度には完成、令和6年度からの使用開始をめざし、令和4年5月9日に起工式が執り行われました。式典には、Jean・Christophe Barland プリストル・マイヤーズスクイブ株式会社代表取締役社長や村上章施設担当理事をはじめ、安藤忠雄株式会社安藤忠雄建築研究所代表取締役、山下浩一清水建設株式会社常務取締役など工事関係者らが出席し、工事の安全を祈願しました。



写真1 「SHIRAN CAFE」の内装



写真2 中庭にはテラス席を配置

「居心地のよい空間」をめざして SHIRAN CAFEは リニューアルから1年を迎えました

平成2年1月6日に開館した芝蘭会館（平成16年に京都大学医学部の創立百周年を記念して建設され、以降は芝蘭会館別館に名称を変更）は、併設するレストラン「しらん」において、本格的で美味しいフランス料理を提供してきました。

学生にも教職員にも
使い勝手の良いメニュー

「SHIRAN CAFE」ではこの度、京都大学の学部生・大学院生と教職員、医学部附属病院の教職員にリーズナブルな食事を提供するため、京都大学の卒業生やOB・OGの方にとりやすいメニューがあるのかを徹底的に調査しました。

運営体制も刷新
新装開店にともない、新たにレストラン「SHIRAN CAFE」を運営する「株式会社ステップ・まんざらグループ」は、1985年創業で、京都市内に8店舗と滋賀県に3店舗を展開しています。居酒屋業態に留まらず、カフェ事業や病院食事業など、幅広い事業を展開する企業です。

「改装コンセプトは「居心地の良い空間」

「SHIRAN CAFE」ではこの度、京都大学の学部生・大学院生と教職員、医学部附属病院の教職員にリーズナブルな食事を提供するため、京都大学の卒業生やOB・OGの方にとりやすいメニューがあるのかを徹底的に調査しました。

さらに、芝蘭会員向けの割引制度を考案中であり、芝蘭会

会員の医学部生・大学院生・教職員は、1割から2割の割引料金での利用が可能となる予定です（芝蘭会が割引料金を負担）。

新しいレストランのコンセプトは「居心地の良い空間」を創出することです。お客様がゆったりとくつろぐことができる空間を提供したいという想いから、カフェ業態を展開することとしました。

「中庭にはテラス席も
また、令和元年からの新型コロナウイルスの影響は大きく、生活様式

75回・2022 (令和4) 年版 「芝蘭会会員名簿」を刊行しました

名簿作成にご協力いただき、ありがとうございます。この度、令和4年11月末に「芝蘭会会員名簿」を刊行いたしました。名簿作成にあたり、会員の皆様から快く異動情報等をお寄せいただき、感謝申し上げます。

- 会員名簿：A4判、813頁
- 会員頒布代：1部 5,500円（消費税を含む）
※但し、会費納入者に限る。その他は 11,000円（税込）
- 送料：900円

会員名簿をご希望の方は
芝蘭会事務局（075-751-2713）までお問い合わせ下さい。



